

---

# ロックマンEXE Another Future

朱空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロックマンEXE Another Future

### 【Nコード】

N7372I

### 【作者名】

朱空

### 【あらすじ】

　　電腦獣事件から20年後の世界。インターネットは、謎の黒い影の脅威にさらされていた。私は、一科学者として、その動向を見ついでいく。

## 1・Prologue (前書き)

これは、ロックマンエグゼの世界をベースにした妄想小説です。設定に関して、自己解釈が多くなると思います。特に、流星のロックマンを未プレイなので、そこにつながる設定には矛盾が生じる可能性があります。また、続くかどうかも分かりません。それでも読みますか？ YES/NO

## 1・Prologue

グリッド上を赤い光が駆け抜ける。

「ブルース、後ろだ」

赤い光の後ろには、黒い影の姿。両者とも、同等の速度を保ちつつ立ち回りを続けている。

どちらが攻めているのか、どちらが守っているのか、一科学者の自分にはとうてい判断がつかない。

戦いの動向を理解しているのは、赤いナビ、ブルースEXEと、そのオペレーター、伊集院炎山、そして、SSSランクをも遙かにしのぐブルースと互角に戦っている、黒い影の存在だけだ。

「回り込め」

炎山の命令は簡潔なものだ。だが、ブルースEXEにはそれだけで十分に伝わる。フルシンクロではないが、それに近い状態なのだろう。二十年以上ウィルスバスターイングを続けてきた二人だ。その積み重ねは、プログラムでは決して再現することはできない。

だが、その二人をしても、容易には倒すことのできない黒い影。騎士のような姿をしたそれは、ソードを武器とするスウォーディンという一般的なウィルスに酷似している。だが、あくまでも姿だけだ。大きさは、通常のスウォーディンの三倍はあるし、攻撃力、演算速度、思考レベル、どのデータを見ても桁違いだ。

しかし、そのようなイレギュラーウィルスは、これまでに何度も見てきた。こいつよりも勝るデータをもつ個体も、なかにはあったかもしれない。

ただ、決定的に異なる点が、この黒い影にはある。

「流せ」

黒い影の、ソードによる攻撃。ブルースEXEも、自らのソードで対応し、それを受け流した。

黒い影のソードがグリッドの地面に突き刺さる。

するとどうだ。

瞬く間にグリッドが浸食され、黒く波打つ穴が生じた。ブルースのソードにも、同じような侵蝕が見られる。

この、侵蝕を伴う攻撃こそが、黒い影を他のウィルスと区別する理由だ。

バグキューブ。

黒い影のスウォーディンの姿をよく見ると、たくさんの黒いキューブで構成されているのが分かる。それらは流動的に動き続け、不気味な波を発している。

バグキューブには、特殊なプログラムが組み込まれているらしい。それは、接触した相手のプロテクトを容易に破り、深刻なバグを生じさせるというものだ。現在、その侵蝕を食い止めるプロテクトはほとんど存在していない。

「バトルチップ、パラディンソード、スロットイン」

炎山のPETのスロットにチップが挿入される。それと同時に、ブルースEXEの右腕には巨大なソードが構築された。

パラディンソードは、ソード系のチップの中では、最強クラスの攻撃力をもつ。

ブルースEXEは疾走を止め、黒い影を待ち受ける姿勢に入った。黒い影は、それを隙と見たのか、大きくソードを振り下ろす。ディスプレイの処理が追いつかず、残像を写してしまうほどの攻撃。だが、ブルースはその瞬間に黒い影の懐に飛び込んだ。

「シラハドリ」

炎山の短い声。ブルースEXEは、空いている左手で音速のソードを受け止めた。手のひらに侵蝕が始まるが、攻撃の勢いは完全に止まる。

刹那の間隙。

次の瞬間、ブルースEXEの右手、パラディンソードが横一文字に走った。

「終わりだ」

黒い影は上下に切り裂かれ、瞬時に消滅した。画面に表示される  
COMPLETEの文字。  
戦いが、終わった。

1・Prologue [END]

## 2・Problem

黒い影。

この脅威への対応については、科学省からの公式見解が出ている。

通常のウイルスに、バグの蓄積等の理由から特別変異が起こり、凶悪化したもの。現在、オフィシャルの精鋭部隊がデリートにあたり、封鎖とされている。なお、この特別変異ウイルスが発生したエリアは、一時封鎖とする。

これだけだ。バグキューブに関する事、侵蝕攻撃に関する事などの情報は公開されていない。

ウライインターネットでは、機密事項も流布しているのだろうが、まだ一般のオペレーター及びナビには、それほど情報が漏洩しているわけではない。

科学省、いや政府、更にいえば各国の上層部は、この脅威に関する詳細を隠そうとしているのだ。  
なぜか。

事実を公表すれば、世界全体が大きな混乱に見舞われるから、という理由もあるだろう。

だが、それ以外にも訳がある。

一つは、バグキューブのプログラム解析が不可能だということだ。バグキューブは、単体であっても科学省中枢を守るプロテクトを一瞬で破壊するような代物だ。これに対する研究のために、様々な方法で解析がなされたが、全てが失敗に終わっている。

そのデリート性能の高さから、現在のアクセスプログラムでは、バグキューブの核に到達できないのだ。

つまり、バグキューブには、接触した相手のプロテクトを容易に破り、深刻なバグを生じさせる能力がある、というのは、戦闘や侵

蝕を受けたプログラムに対する解析から導き出された結果論であり、バグキープそのものの解析から得られた答えではないのだ。

可能性を述べれば、バグキープにはまだまだ未知の能力があるかもしれない。

そのような不確定要素を発表するわけにはいかないだろう。科学省には、バグキープに関する早急な研究が求められている。科学省のメンツを守るためにも、何とかしなければならぬ課題なのだ。と、自分が思考の整理をしていると、目の前のディスプレイに同僚の顔を表示したウィンドウが表れた。

「更新情報だ」

声と同時に、データが送信されてきた。

「光熱斗博士がまとめたものだ。目を通しておけよ」

感謝を述べる間もなく、同僚の顔が消える。科学者には、道徳心に欠けるものが多いが、それに加えて緊急事態なのだ。誰もが、細かいことに気を配ってられない。

…光熱斗博士、か。

現在、ニホン科学省の代表を務めている光祐一朗氏の息子であり、また、若くしてコンピュータネットワーク社会に革命を起こした天才である。

彼の構築した様々なプログラムが、今では世界中で欠かせないものとされている。

更に、新しいネットワークシステムの提唱。無線通信技術を中心としたその理論は、我々の想像を遙かに超えるものだった。世界中の科学者は、争うように彼の論文を読み、電波によるネットワークシステムの研究が始められた。

そんな、技術革命の光が見え始めたときだ。

黒い影の出現。

その脅威は瞬く間に世界中に広まり、科学者達はそれらに関する研究に追われねばならなくなった。もちろん、新しいネットワークシステムの研究をしている暇などなく、現在、計画は凍結中だ。

そして、今を生きる天才、光熱斗博士には、その対応策について大きな期待が寄せられた。

だが。

彼は、そんなことにかまってはいられなかった。それは、黒い影の脅威よりも大きな問題を抱えていたからである。この問題は、本当にごくわずかの人間にしか知られていないことである。私がそれを知っているのは、彼のプロジェクトチームに参加しているからだ。彼の抱える、深刻な問題。

それは、

ロックマンEXEの暴走、及び失踪だ。

2・Problem 「END」

### 3・Beginning

黒い影に、正式なコードネームが付けられた。

Odd Virus .

オッド・ウイルス。

科学省は、黒い影の存在をウイルスとして定義したらしい。

今までは、バグを生じさせることや、バグキューブの集合体であるように見える点から、バグの異常種という見解もあり、その定義は対策委員会でも大きなテーマとして取り上げられていたようだ。

まあ、姿も一般的なウイルスの形と酷似したものが多し、公式見解で「特別変異のウイルス」といつているわけだから、ウイルスという定義にしたほうがよいだろう。

さて、Oddとは、「異常な」という意味だ。

確かに、オッド・ウイルスの存在は異常といえる。その被害は、WWWやゴスペル、ネビュラといった、巨大犯罪組織が絡んできた事件よりも大きくなりつつあるのだ。一つ例を挙げると、オッド・ウイルスがシャロアのANSAに侵入した際には、宇宙センター内のプログラムが暴走し、人工衛星が地球に落下しかけるという大惨事になりかけた。

オッド・ウイルスへの対応は、伊集院炎山と、そのナビであるブルースが中心として組織された精鋭チームが行っている。

主な活動は、オッド・ウイルスのデリート、そして原因の究明だ。チームは、世界中のネットワークでバスターリングをしつつ、情報収集を行っている。情報に関しては、ウインターネットで流れているものであってもかまわないとのことだ。オッド・ウイルスの発生原因は、現在のところ完全に不明だ。手がかりになるようなものは、全て集めるとのことなのだろう。

また、バグキューブに関する研究は、Dr・リーガルが行っている。

彼は、かつては犯罪組織ネビュラのリーダーであった男だ。しかし、今では改心し、世界を代表する科学者として社会に貢献し続けている。

Dr.リーガルの専門分野は、バグ、そして負の感情エネルギーと呼ばれるものだ。バグキューブには、その二つの要素が大きく関連していると予想されている。ダークチップと似たようなものなのかもしれない。

…。

負の感情エネルギーとは、どういったものなのか。

これは、我々人間がもつ心に関係してくるものだ。その研究は、心理学の分野にあたるように思われる。

そんな、有機的な問題が、電気信号にすぎないと考えられていた電脳世界に生じてきたのだ。

なぜか。

問題の発端は、Dr.リーガルが、かつてネビュラを率いて製造していたダークチップだと考えられることが多い。

しかし、光熱斗博士の論はこうだ。

ロククマンEXEのもつココロ・プログラムこそ、プラス、マイナスを問わず、全ての感情エネルギーの始まりだったのだ、と。

全てのネットナビの生みの親とも言える、光祐一朗博士。その息子は、光熱斗博士だけではなかったのだ。

光熱斗博士の、一卵性双生児の兄、光彩斗。

ロククマンEXEは、光彩斗のDNAデータを人格データに変換し、エクサメモリと呼ばれる大容量記憶装置に保存することで誕生したナビだ。

そして、「心」をもつ世界で初めてのナビでもある。

ロククマンEXEのココロ・プログラムは、その後のナビ開発に大きな影響を与えた。疑似人格形成は、全てロククマンEXEを元に行っているといっても過言ではない。

ロククマンEXEは、全てのナビの感情の素体である。故に、ロ

ツクマンEXEがネットワーク上に存在を始めたときから、感情エネルギーは生じ始めていたのだ。

光熱斗博士は、様々なプログラム開発の他に、ナビの感情の研究も行ってきた。彼の経験と知識を元にした理論は、電腦世界に生じる乱数のような感情を、より人間に近いものに定義しようとしていた。

ところが。

感情の原初であるロツクマンEXEは、ある日、突然、暴走した。暴走の現場となった研究用のネットワーク空間は、解析不能なノイズに覆われている。そこへのリンク先は残っているが、潜入したプログラムは全て帰ってこなかった。

ロツクマンEXEはどこに消えたのか。

「電腦世界において、ネットワークの外側がどうなっているのか」  
今、光熱斗博士がその答えを導き出した。

「ネットワークという形を構築し、同時に固定する0のデータ群。それこそが、ロツクマンの向かった世界だ」

また、新たな動きが始まる。

3・Beginning [END]

## 4・Enable

「科学省スクエアへのアクセスを開始」

ロックマンEXEが消えた0のデータ群による世界、ゼロエリアへ侵入を目標とした我々プロジェクトチームは、そのために一体のナビを構築した。

クリーヴェルEXE。 <切り開く者>

それが、コードネームだ。

クリーヴェルEXEには、ゼロエリアに侵入するための方法の究明に関する任務が与えられた。ゼロエリアは、0のデータ群の圧力により、通常のプログラムは侵入した瞬間に押しつぶされてしまう。まずは、その圧力をどうにかしなければならぬ。

また、侵入の方法が分かった後には、ロックマンEXEとの直接接触をも視野に入れ、捜索部隊の一員となってもらう予定だ。クリーヴェルEXEには、ロックマンEXEを救出するために必要となるプログラムが組み込まれているらしい。その詳細は、光熱斗博士しか知らない。

付け足すと、光熱斗博士は気になることを述べていた。

オッド・ウィルスの発生は、ロックマンEXEの暴走と関係している可能性がある、と。

ロックマンEXEのもつ莫大な感情エネルギーが、オッド・ウィルスとつながるかもしれないのだ。クリーヴェルEXEによる調査は、オッド・ウィルスの問題の解決策を見つけないという意味でも重要なものになる。

「クリーヴェルEXE、科学省スクエアへアクセス成功。次の指示を」

「君には、まずウインターネットに向かってもらおう。道順のデータを送信するので、それに従って進んでくれ」

「了解」

クリーヴェルEXEへの指示は、光熱斗博士が直々に行っている。彼は、オペレーターとしても優秀だ。ネットバトルに関しては、その腕に並べるものはほとんどいないだろう。

クリーヴェルEXEの反応が、大型ディスプレイに表示されたネットワークマップ上で動き出した。私の仕事は、クリーヴェルEXEの残したログへの対応だ。機密任務であるため、必要と判断した場合は、彼のログ、つまり足跡を消す必要も出てくる。また、そのログを解析することで何か分かることがあるかもしれない。

特に、オッド・ウイルスとの戦闘のログは、未知の可能性を秘めている。

「ウイルス、キャノーダムと遭遇」

「初の実践だ、落ち着いていけ。模擬戦と同じように戦えば勝てる相手だ」

「了解。バトルチップの転送を願います」

「オーケー。バトルチップ、ハイキャノン、スロットイン」

キャノーダムは、インターネットの比較的浅いところで見られる、オーソドックスなウイルスだ。固定式砲台のような姿をしており、自分から移動することはできない。攻撃は、直線上の敵をロックオンし、キャノン砲を発射するという単純なものだ。実践の練習相手としては、ちょうど良い。

クリーヴェルEXEにハイキャノンのデータが転送され、右腕がキャノン砲に変化した。

戦闘開始だ。

クリーヴェルEXEがキャノーダムの前へ出る。と、同時にキャノーダムがロックオンを開始する。だが、下位のキャノーダムはロックオンするまでのタイムラグが長い。そこが隙になる。

クリーヴェルEXEは、ロックオンされる前にハイキャノンを構え、発射。高速の弾丸が命中し、キャノーダムがデリートされる。

が、次の瞬間。

クリーヴェルEXEが後ろに吹き飛ばされた。

「大丈夫か!?」

「…ダメージは軽微。戦闘続行可能」

「よし…」

なにが起きたのか。大型ディスプレイを注視する。

すると、デリートされたキャノーダムがいた場所の後方に黒いキャノーダムの姿が見えた。

…オッド・ウィルスだ。

どうやら、黒いキャノーダムにはステルス機能があるらしく、口  
グを取るための簡易データマップには反応が写し出されていない。

さて、いきなり危機に立たされたようだ。

黒いキャノーダムの攻撃は、クリーヴェルEXEの左肩にかすつ  
たらしく、そこにはバグの侵蝕が見られる。おそらく、修復するま  
では左腕は使えないだろう。

「バトルチップ、バリア、フミコミザン、スロットイン」

光熱斗博士が、新しいバトルチップをPETに挿入した。

同時に、クリーヴェルEXEの周りに薄いベールのようなバリア  
が現れ、右腕は片刃のソードに変化する。

黒いキャノーダムが再びロックオンを開始した。速い。

ロックオン処理の能力も、そうとう強化されているようだ。ステ  
ルス機能もあり、厄介な敵だ。

クリーヴェルEXEは、疾走を開始。黒いキャノーダムへ肉薄す  
る。

だが、ロックオンのほうが速い。

閃光。バグを伴った黒い弾丸が発射され、クリーヴェルEXEに  
直撃。爆炎を上げる。

だが、クリーヴェルEXEの疾走は止まっていない。バリアは完  
全に破壊されていたが、彼自身は無傷だ。疾走の速度は更に上がり、  
一瞬で黒いキャノーダムの前に辿り着いた。

居合いのような閃。

黒いキャノーダムは縦に切り裂かれ、反応を消滅させた。

「…コンプリート」

「よくやったぞ」

戦闘終了だ。クリーヴェルEXEの性能は、かなり高いようだ。

オッド・ウィルスへの急な対応は、見事としかいえない。

自分は、このログの解析に移ろうと思う。これから先の戦闘でも、おもしろいデータが取れそうだ。

4・Enable 「END」

## 5・Emotion

クリーヴェルEXEの疑似人格プログラムは、感情が薄いものに設定されているようだ。

「ウライインターネット1にアクセス。…マップデータをロード。先に進みます」

「ここから、ウィルスも強力になってくる。気をつける」  
「了解」

光熱斗博士との会話も、極めて事務的なものばかりだ。テスト用のネットワークから出て、外の電腦とつながったのは今日が初めてなのに、なんの感動もないのだろうか。通常、新しく構築されたナビの疑似人格プログラムは、初めてのものに対して何らかのリアクションをとるようになっていたものなのだが。

噂だが、光熱斗博士がナビの感情を恐れているという話がある。ロックマンEXEの暴走が、感情エネルギーの増大に関係している可能性があることから推測されたことだろう。

しかし、光熱斗博士が感情を恐れるだなんて、自分には信じることが出来ない。

確実な任務遂行のために、感情の薄い人格プログラムを作ることには、よくある事例だ。ブルースEXEなどが代表例に上げられるだろう。特に軍事用のナビは、冷静な判断が求められるため、感情の起伏は少なくされる。

…と、そのような論理的な推測もあるが、自分の主観だけで見れば、かつて多くの事件に立ち向かい、その全てを解決してきた彼が、感情なんてものを恐れるはずがないと思う。

「ウライインターネット2に着いたな。そのまま警戒して進んでくれ」

「了解」

ウライインターネットでも、クリーヴェルEXEの行動には、今の

ところ問題は生じていない。

クリーヴェルEXEの戦闘能力は、模擬戦でも高く評価されていた。実戦でも、かなりの力を発揮している。

クリーヴェルEXEの戦闘用プログラムには、ブルースEXEを中心とした、オフィシャルのナビ達が積み重ねてきた実戦データが応用されているのだ。データ上では、半端なウィルスに負けるはずがない。

だが、ネットバトルには、多くの乱数が絡んでくる。

それは、タイミングや運といったものもあるが、一番大きなファクターは感情だろう。

例えば、フルシンクロ、という現象がある。オペレーターとそのナビの人格プログラムが、100%共鳴したときに起きるものだ。

その効果は絶大で、どんなアクセラレータも及ばないだろう。戦闘においては、オペレーションのタイムラグをほぼゼロにしたり、状況の判断能力を向上させたりする。

ただ、フルシンクロは感情エネルギーが大きくないと発生しない心、と言うと非科学的かもしれないが、そのような概念が電脳世界には確かに存在する。それが、オペレーターとナビを結びつけるような効果をもつと考えられているのだ。

今まで、英雄と呼ばれてきたオペレーター、ナビは、心の概念を強くもっている。

光熱斗博士とロックマンEXEの間には、とても強い絆があった。それは、ココロ・プログラムの影響かもしれないし、兄弟の間に通じる以心伝心なのかもしれない。ただ、二人に共通するのは、自分の正義を貫き通す、強い感情エネルギーだ。

彼らは、強い感情エネルギーをもっているからこそ、英雄たり得たのだと、そう思う。

「ウライインターネット3にアクセス。異常なし」

「ウライインターネットスクエアまでは、もう少しだ。頑張ってくれよ」

「了解」

そんな英雄が、感情を恐れるはずがないのだ。

5・EMOTION [END]

\* Piece 01

「力が欲しいのか」

不安を纏う光の中で、天使が囁いた。

「護るための力が欲しいのか」

力を求めるのは、護るためでもあり、追いつくためでもある。熱を帯びた青い背中が、いつも前にあった。

「お前の護りたいものは何だ」

護りたいものは、自分達だ。自己の存在理由だ。強者であることが、自分達の証明だ。

「力は正しく使われなければならない」

自分達は、正義のために力を使ってきたはずだ。世界を救うために戦った。それでも、心には穴が空いたままだった。

「汝に証明を求めよう」

天使が、剣を抜き放つ。

護るための剣だ。

自分達が求める力だ。

欲しいものがある。

心の穴を埋めるために必要なものがある。

目の前に。

「正義を示せ」

示して見せよう。

冷たさに秘める炎のような、正義を。

哀しみを切り裂き赤く光る、正義を。

赤い剣が、天使へと振り下ろされる。

\* Piece 01 [END]

## 6・Contact

「ウライインターネットスクエアにアクセス」

「よくやった」

その後、ウライインターネットスクエアまでは問題なく到着した。道中で、クリーヴェルEXEの戦闘能力は確かなものだと言明されたと思う。データを見る限り、その動きにはいまだ余裕すら感じられる。

「次は、通称『ヤミイシャ』と呼ばれるナビと接触してもらおう。

掲示板に、このキーワードを書き込んでくれ」

「…データ受信完了。了解」

『ヤミイシャ』とは、ウライインターネットスクエアでは有名な存在だ。ゴスペルの事件の際には、電脳世界の凍結を解決するのに一役買ったらしい。オペレーターは未だ不明のままだが、プログラミングの腕は確かな物だろう。

「…書き込み、終了しました」

「これで、どこかにヤミイシャが出現しているはずだろう。探してみてくれ」

ヤミイシャは、その名の通りワクチンプログラムを作ることに長けている。今回は、アンチ・オッド・ウィルス用のプログラムを作ることができないか、掛け合ってみようだ。

また、ゼロエリアへの侵入のためのヒントも得られるかもしれない。

ヤミイシャがそこまで信頼に値するのかは、正直自分には解らない。むしろ、科学省で解析を進めた方が早いとも思っている。

ただ、光熱斗博士にもそれなりの考えはあるらしく、オペレーションの初手としてヤミイシャとの接触を選んだのだ。

「…貴方がヤミイシャか？」

「そうだが…君が今回の依頼者か？」

クリーヴェルEXEとヤミイシャが接触した。

光熱斗博士が、その通信回線へと割り込む。

「久しぶりだな、ヤミイシャ」

「…光熱斗か。ロックマンはどうした」

「今回は、ロックマンのことも含めて、依頼したいことがあるんだ。オッド・ウイルスに関しては、どこまで知っている？」

光熱斗博士とヤミイシャが、今回の事件に関しての情報交換を始める。

ウライインターネットに関わるものなら、オッド・ウイルスについて知らないはずがないだろう。

また、科学省でも関知していない情報をもっているかもしれない。「オッド・ウイルスへの対応策か… まだ私も解析し切れていない点も多いが、その依頼、引き受けよう」

「ああ、頼む。報酬は、いくらでも出そう」

「有り難いことだ。しかし、ロックマンが… 難しい話だな」

「ゼロエリアへの侵入については、後回しでも構わない。俺の推測が正しければ、オッド・ウイルスに対処していくことで答えは見つかるはずだ」

「そうか。…まあ、かつてのフォルテのようにならないよう、気をつけることだな」

「…」

フォルテ。

あのナビに関する信実は、その全てが明らかになっていくわけではない。この場で詳細を知っているのは、光熱斗博士くらいではないだろうか。

しかし、我々が関知していることから考えると、今のロックマンの現状は、フォルテのそれと類似しているかもしれない。

力の暴走が、そもその原因だとするならば、だ。

ヤミイシャの指摘は、かつての破戒を象徴とする強者が、再び現れることを忌避してのことだ。

もしも、ロックマンがそうなってしまった場合…  
それに対抗できる存在は、おそらく皆無なのだから。

6・Contact ]ENZ  
[DD

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372i/>

---

ロックマンEXE Another Future

2010年10月10日19時53分発行